

江戸の装いと油壺

油は灯油としての利用以外に、整髪料としても使われている。特に庶民の文化が花開く元禄以降に生活に定着したものと思われる。ここでは油壺を巡っていくつかエピソードを紹介する。油壺とは、油を入れる壺のことであるが、写真で紹介しているのは、髪形を整える油を入れる容器のことである。古伊万里が多かったようである。大きさは、女性の片手に軽く乗る大きさである。

ネットショッピングなどで骨董品として出品されている物を見ると、安いもので1000円、高い物で3万円、4万円と値の張るものが出ている。江戸時代には、これが庶民の特に女性の髪形を整えるおしゃれ道具の必須アイテムであったのだ。

油壺については『油壺の用と美』(英 一太 著:1995年 北辰堂)が出版されている。そこから

少し紹介すると、毛髪に油を用いるようになったのは鎌倉時代で、使った油は丁字油(ちょうじゆ:チョウジノキ。現在のクローブ油)というものである。江戸時代は、ごま油・くるみ油・菜種油が使われ、性状からすると艶出しや汚れ落とし用の梳き油として使われたものと思われる。江戸時代も下ると椿油などもよくつかわれるようになった。

髪形を整えるには、今日ではお相撲さんの髪形を思い浮かべればわかるがしっかりと形が整う整髪料、つまり固練り油、鬢付け油が使われた。鬢付け油とは、「蠟燭から流れ出た蠟に松脂を入れて練り合わせたものを髪に付けた」(『近世女風俗考』山東京伝、弘化四年:1847年)のが始まりとされ、その後香料などを入れ込んだ「伽羅油」が開発されていく。

こうして身だしなみやおしゃれを楽しむアイテムとして水油、固練り油と共に油壺も色彩や形にこだわり艶の文化をはぐくんだのである。

また本書には、井原西鶴の『好色一代男』(1682年)にでてくる香油も載っているので紹介する。

「匂い油」 : 白檀・丁字などの香料をごま油に浸した香油

「丁字入りの油」: 丁字の花からとった丁字油には、花の香りがある天然の香油ともされていた。

「花の露」 : 匂い油の一種で、整髪油としても用いられたが、後に化粧水としても使われたらしい。(製法は複雑で)「龍腦六匁(一匁<もんめ>は3.75グラム)、片腦七分、此の二色に胡桃の油五匁入れ、成程よくすり、白檀十匁細かに刻み油十匁によく浸し



油壺提供 遠藤慶吉商店

おき、絹に包みてしぼり白檀を捨て油ばかりを用ゆ。唐臘十五匁と油四十匁入せんじ、右龍腦、白檀の油と合わしこすなり」(『増補 拾玉智恵海』(延享年間))

「梅花の油」：胡麻油に龍腦（ボルネオール）、麝香、丁字などを配合してあり、梅の花に似た香りの水油。

この梅花油は、江戸時代の油問屋、仲買の取り扱い品目として水油、色油と並んででてくる油で、頭髪油としては最もポピュラーなものであったと思われる。

少し時代は下るが『大阪の水油』（大阪市立海洋博物館 なにわの海の時空間 平成21年度夏季企画展）資料には、木村猶三郎商店（油屋：大阪中央区塩町通）の見取り図（明治～大正ごろ）が載っている。敷地の店舗の奥に「梅花油製造場」があり貯蔵蔵（28個の大甕が記されている）も備えている。この鬢付油は明治になってからも人気があったようである。

その他、「白菊の油」（「花の露」に同じか）、「銀出油」（髪に塗ると銀のように艶が出る）、「雲井香」（製法、組成、名の由来に記載なし）など、香りを競った整髪油が女性の髪を装ったのであろうか。



歌川国貞 絵兄弟忠臣蔵六段目
江戸東京博物館 蔵

「女として生まれては一日も白粉を塗らず素顔にあるべからず」（『女重宝記』）。女性のお化粧やファッションは、何時の時代も文化の中心にある。